Research Institute for World History
Newsletter
No. 31 July 2018

CONTENTS

■ 各国の世界史研究者のあいだにおける議論の「進め方」試論
—世界史作品を批判するために　三枝守隆　— 1 頁
■ 箕作麟祥編『萬國新史』翻刻によせて　— 10 頁

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/
世界史研究所「ニューズレター」第31号（2018年7月）

各国の世界史研究者のあいだにおける議論の「進め方」試論

—世界史作品を批判するために

三枝守隆（立教大学）

世界史をめぐる世界各国の研究者の主張には、互いに相容れないようなものが少なくない。しかし、「真の世界史」、あるいは「正当な世界史」などというものがある、あるいはいつかはどこかで成り立つ、という考え方はどこかしら不自然である、という見方は合意できるのではないか。一方で、世界各国にはさまざまな世界史を内容とする書籍や映像媒体が流通しており、それらは史学の学術的論述よりはるかに物語性が強い[1]。つまり世界史は「作品」なのである。ところが、歴史文学と違ってそれらの作品は、程度の差こそあれ自己の正当性を主張しているように見える。自らを偽りの世界史、あるいはフィクションの世界史とみなすような作品はまずない。いずれにしても世界史についての多様な作品が現前していることは、いかなる研究者でも同意するであろう。これが本ニュースレター掲載の拙論（三枝 2010:5-8）の基礎にある考え方であった。その上に、筆者は世界史作品についての実りある議論を築こうと試みた。

そこで論じたことのうち、あらためて次の三点を確認しておきたい。すなわち、（1）上で述べたように、世界史、ならびに世界史のなかに自国史を埋め込んだような教科書、あるいは宇宙の誕生から現代にいたるまでを物語るグローバルヒストリー、あるいは児童向けの世界史マンガなど、自国語であれ外国語から翻訳されたものであれ、世界各国において、学問的なものから教科書、そして読み物的な作品まで、おびただしく生産され、教育機関、公

共図書館や出版市場において流通している。（2）それら多様な世界史作品を対象とする学術的批判はほとんどないように思われる。しかし、それは必要かつ重要である。その重要性を、他の学問的な領域における類似の事例で位置づけると、文学作品に対する文芸評論となるであろう。しかし世界史作品に対する批判の客観性（または非恣意性）は文芸評論のそれ以上でなければならない。つまり、極端に主観的（または評者の好み）、あるいは政治的であってはならない。そうならないためには理論が必要である。主観的な批判がある程度許容される文芸評論の場合においてさえ、批判理論 (たとえば、Leitch 2001) と称される学問が、各国の文芸評論家のあいだではかなり共有され、文芸評論の基礎となっているようである。くわえて、文芸評論家はその活動を通して読者に良質の文学を紹介する機能をはたすことが社会から期待されている。（3）それでは、世界史作品に対する批判の主体は誰であるべきか。それは各国の世界史研究者ではないだろうか。

この小論は、そのような各国に現に存するさまざまな世界史作品について、各国の研究者がどのように議論しながら進めるべきか、についての試論である。迂遠ではあるが、そのような理想的な議論の進め方を各国の世界史研究者が共有することが必要なのである。そのためには、議論の進め方それ自体についての確固とした理論も不可欠である。そこで、その理論が学問のどのような領域に存するかを、この小論では示したい。

1　世界史作品の言表の性格

世界史作品は、いかにその作者が科学的に、あるいは非政治的に、学問的誠実さをもって叙述しても、他の国の研究者から見れば、差別的な名辞や言説や図像を使って叙述されていると批判される余地はつねにある[2]。ここでは例として地域をあらわす地図の図像を取り上げてみるが、史学の専門研究者の大部分は、地域の名辞や地図には「科学的な根拠」がないことを認識している。しかし、研究者が地域の名辞や地図の図像には、ある政治的勢力に利する言説が包摂されているのではないか、という懐疑をもつに至っても、それ以上その懐疑を学問的に探求する必要に迫られることはめったにない。なぜなら、史学は制度的学問へと成熟しており、他の学問領域の問題を議論しなくても、専門細分化されたそれぞれの研究分野で業績を上げることが可能となっているからである。ところが世界史の学は、研究の対象がまだ専門細分化されていないし、制度化されてもいない。そして、実際の所、高緯度に位置する「先進国」を低緯度に位置する「後進国」よりも大きく描くメルカトール図法や、それにもとづく歴史地図は、長い間人々を呪縛してきたのである（佐藤 2004:117-202）。だから、「後進国」の世界史研究者をまじえた議論では、そのような「先進国」では「常識」となっているような事柄についての懐疑も本来は議論すべきなのである。

それでは、このような差別的な語感をもつ名辞や言説や地図は世界史作品においてはどのような力をふるっているのだろうか。このような問いを世界史の研究

者が発するのは自然の成り行きである。史学における歴史的事象にも差別的な語感をもつ名辞、言説、地図、図像などが極めて多数含まれていることは、よく知られているからである。戦争の名称ひとつとってみても交戦国によって名称が異なるのであるが、このような問題は、ナショナリズムの本性がむき出しになる自国史の分野ではことのほか顕著である。たとえば、フランスにおける自国史の権威であったカミーユ・ジュリアンの『ガリア史』は、今日でも実証主義的な基本文献として評価が高く、日本のフランス史研究者のあいだでも広く読まれている。しかし、そこではフランスの偉大さを強調するあまり、近隣地域で生起した歴史的な出来事が同等に評価されることなく、しかもフランスという国民国家の成立に至るまでの歴史が、現代のフランスの国境線のなかで生起した出来事だけでは説明できないのではないか、というような議論を封じ込めている。フランスの歴史は、近隣地域の歴史を差別的に評価しては説明し得ない。西ヨーロッパ全体という境界のなかで、しかも差別的な評価を脱して始めて語りうるものなのである。このことは、拙論で紹介した歴史家アーノルド・J・トインビーによるジュリアン批判の根底にある問題意識であった（三枝2006:5）。さらに付け加えるならば、このようなナショナリズムが執筆の強い動機となっているようなさまざまな国々の自国史をいくら集積しても、世界史にはならない。世界史には世界史固有の執筆の動機が存するのである。

さて、このような差別的な語感や言説に対する懐疑を論理的に徹底的に考察していくと、言語それ自体を対象とするような原理的な問いに行き着く。つまり、問いそれ自体も当然のことながら言語に依拠しているから、その問いを探求して行くにしたがって、問いと答えをなしている言語を、その言語で議論しなければならないことになる。そしてその議論は人を困惑させずにはおかない困難さを明らかにしていく。それは「自己言及」と呼ばれ、「自己関係」ないしは「自己指示」という哲学的な概念の一つなのである。すなわち、そのような論理構造をもつ理論をそれ自体にあてはめてみると、自己破壊へと問う者を追い詰めていく。たとえば、史的唯物論というイデオロギーもまた上部構造なのであるから、社会の生産力が増加すれば史的唯物論自体も過去の産物となる、というような論理構造である。これについては、マルクスもすでに認識していたことを、現代の哲学者が見出している（Bubner 1973=1986:223-9）。

さらに、現代の世界史の研究者は、史学の学術用語や史料の扱い方に対して、ほかの学問領域からの批判にも見配りをせざるを得ない。たとえば、文学理論におけるオリエンタリズム批判（Said 1978 = 1993）や、人類学における人種主義批判（Levi-Strauss 1952 = 2008）などである。これらの批判は文学理論や現代思想の領域においてはポストコロニアル理論と呼ばれているが、それは現代における植民地主義とは、軍事力や政治的威嚇による支配だけではなくて、学術的な言語を含むさまざまな言説によって、「ヨーロッパ、白人、男性」が「非ヨーロッパ、非白人、非男性」を隷属させようとしているのではないか、という懐疑をあらわしている[3]。

また、東アジア諸国の世界史の研究者は、社会学などの領域からの脱構築主義的な批判 ———たとえば、もと従軍慰安婦たちの口述や伝承は、文書の史料よりも史料的価値が低いというような史学者の考え方の正当性をめぐる批判（上野 2001）———をも、背後に押しやる訳にはいかない。

2 「先入見なき言語」があり得るのだろうか

しかしながらこうした議論は、多くの研究者がもっているある考え方がその根底に隠れているように思われるのである。その考え方とは、「差別なき言語」、あるいは「先入見なき言語」が構築可能である、というような考え方である。では、そのような言語はありうるのだろうか。

このような問題意識をもって筆者はかなり長い間いくつかの学問的領域を渉猟してきた。たとえば、心理学[4]や社会神経科学[5]などの自然科学的なアプローチや、言語学などの社会科学の領域である。しかしながら、それに答えうるような学問領域は見あたらなかった。ところが、哲学の一分野である解釈学において、すでに 1960 年代にハンス＝ゲオルグ・ガダマーによって詳細に論じられていたことことを見出すことができたのである。現代のように、自然科学的な思考が、われわれの精神を説得する最後の拠り所となりがちな時代においては、哲学的な思考はわれわれにはあまりなじまないかも知れない。しかし哲学は、本来は自然科学と同様に、あるいはそれ以上に、徹底的に人間の理性によっているのである（Meillassoux 2006=2016:60-4）。理性は科学が独占できることがらではない。しかも、理性は現生人類すべてに本来的に備わっていることは自明のことである。だから、理性をわれわれの議論の最後の拠り所とすることは、われわれをヨーロッパ中心史観に必然的に導く、ということにはならない。一方、現代の世界各国の世界史作品の一部にはエスノセントリズム（自民族中心主義）と呼ばれる非理性的な執筆動機が見え隠れするような言表が含まれているのが現実である。それらを含む世界史作品を批判するための基礎理論としては、本来的な哲学は極めて適切ではないだろうか。むろんガダマーは「ヨーロッパ、白人、男性」である。しかしその作品からは、彼が理性によってのみ世界を凝視していたことがわかる (Gadamer [1960]1974=2012 Ⅲ :863)。

3 先入見あってのテキスト理解 ———哲学的解釈学の洞察

あらかじめお断りしておくが、筆者は解釈学の専門研究者ではないので精緻な理論を展開することはできない。しかし解釈学はすでに 1920 年代には和辻哲郎（津田 2014）や九鬼周造 (九鬼 2011) がドイツで学び、日本の仏教史や風俗の考察に「適用」していたのである。ところがそのように 90 年以上の伝統をもっているにもかかわらず、他の学問領域において、それほど「適用」されていないようである。しかしながら、世界史のように世界各国の研究者が共有する認識論としては、解釈学は有効であるように思われるのである。

さて、ガダマーの『真理と方法』では、「先入見」という語の語源となったラテン語「praeiudicium」には、悪い語感がなかったことが実証主義的に論証されている。そこでのガダマーの見解によれば、「先入見」とは、ラテン語の本来的な意味においては、ことがらを詳しく判断することに先行する仮の判断という意味に解されている。この点に関し『真理と方法』において非常な説得力をもって主張されているのは、この「先入見」という概念と、人間があるテキストに向かい合ったときに生起する現象とを結びづけて、テキストを理解するとはどのようなことか、という点である。そこで主張されているさまざまなテーゼのなかから、当面のわれわれの必要に即していくつかのテーゼを簡潔に敷衍してみよう。

（1）言語において「先入見なき言語」などというものは存在し得ない。とはいうものの、それを認識することは非常に困難である。（2）「先入見」を認識するもっともよい機会は対話においてである。ただしここでいう「対話」とは、必ずしも人と人とのあいだの口頭での対話に限定されず、人間とテキストとのあいだに生じる「対話」をも含む広義のものである。筆者の見解を付け加えるならば、その「認識」をうながすような「対話」は、われわれが実際に口頭で対話している場面ではめったに生起しない。ことに、会議の場面では不可能に近い。（3）さらに、ここでいう「対話」とは、プラトン描くところのソクラテスがおこなったような「対話」、すなわち弁証法（[希] ディアレクティケー。「問答法」とも訳される）を指す。つまり、テキストに書かれたディアレクティケーなのである。「対話」が必ずしも口頭での「対話」に限定されないという先の規定は、この点にも由来する。プラトンの作品では、たとえば『ピレボス』という作品における三人の登場人物（ソクラテス、プロタルコス、ピレボス）が、快楽、思慮、知性の優劣を競ってディアレクティケーをするテキストに非常によく現わされている（プラトン 1975:163-337）。（4）そのようなディアレクティケーにおいてまず起こる現象は、意識的であろうが無意識的であろうが、自分がこれから読もうとするそのテキスト全体にはこのようなことが書いてあるだろう、という判断である。このような判断はガダマーの師ハイデガーによって「先行把持」として概念化されていた。ガダマーはその「先行把持」概念を拡張して、先に述べた「先入見」に加えて、読者が想定するテキスト全体と、今そこで読んでいるテキストの部分との関連づけ、という現象をも包摂した。つまり「全体」と「部分」のあいだの循環という現象である。先にのべた筆者の言い方であらわせば、「ことがらを詳しく判断することに先行する仮の判断」とは「テキスト全体にはこのようなことが書いてあるだろうという判断」のことであり、それと「いまそこで読んでいるテキストの部分」とのあいだに、行きつ戻りつという循環がある、ということである。（5）そして、読み進めているうちに、すでに読み取ったテキストにはこのようなことが書いたあったという後ろ向きの判断を下しているという現象が起きる。（6）さらに読み進めているうちに、ある個所で違和感を覚えたり、わからない個所が出てきたりする場面に遭遇

するとする。その現象を『真理と方法』では「テキストにつまずいた」と比喩的に言いあらわしている。これを契機として、先に述べた「先行する判断」を保留に付し、それと同時に「すでに読んだところの判断」も保留にするという現象も起きる。（7）一方、読者の心の底からからは、さまざまな「思いつき」が湧き上がってくるという現象が起きることが非常に多い。もしも､それら｢思いつき」に、われわれ読者が自身の精神を明け渡さずに、あくまでもそのテキストが語りかけてくることがらそれ自体に意識を集中させ、問い続けていくと、やがてその答えが書かれている個所を見出して納得する。（8）それと同時に先に述べた「先行する判断」と､「すでに読んだところの判断」を修正するという現象が起こる。先に述べた「つまずく」個所との遭遇は次々と生起するのであるが、このような現象は、たとえばわれわれが外国語のテキストを読んでいる時によく経験することである。つまり、ある単語の意味がわからなくて辞書を引くと何通りかの意味が記載されている場合である。われわれはその単語の意味を保留にしておいて読み進め、ある程度テキスト全体の大意がとれてから、その「つまずいた個所」にもどって、辞書の何通りかの訳のなかから適切と思われるものをあてはめる、というような現象である。（9）これらの現象はある場合には、一定の方向に向かう。つまり、問いとその答えが交互にあらわれるという現象が起こる。それはまるで問いと答えが鎖のようにつながっているようなので、『真理と方法』では「連鎖」と呼ばれている。その連鎖は、テキストのある部分とテキスト全体とのあいだを循環していることになる。このような問いと答えの連鎖、ならびに問いと答えの連鎖の循環は、読者がテキストに問いかけ、テキストは答えるというディアレクティケーがなりたっているということなのである。ここで筆者の見解を付け加えれば、一部の読者は、このようなディアレクティケーが起きているという現象には気がつくが、しかしその現象を擬人化して、読者と作者との対話とみなしてしまう。しかしそれは読者と作者のディアレクティケーではない。そうではなくて、読者とテキストとのあいだのディアレクティケーなのである。現代的な比喩で言いかえれば、読者の頭脳というパソコンに格納されている言語というアプリケーションソフトと、テキストから立ちのぼってくる言語というアプリケーションソフトとが、ディアレクティケーをおこなっている､といえる｡（１０）われわれはそのようなディアレクティケーを自分の意思で制御できない。あらかじめ予測できないし、もしその予測に固執するとディアレクティケーが成り立たない。（１１）以上のような現象を先の比喩をもちいて包括的にいえば、理解とは読者の頭脳に格納されている言語に含まれていた「先入見」と、そのテキストの言語に含まれていた「先入見」とが引き起こす一回限りの現象といえる。すなわち、二つの先入見が融合することが理解なのである。（１２）先にあげた『ピレボス』の最後のテキストまで読み進むと、そこには結論めいたものがない。登場人物のあいだのディアレクティケーにおける最後の場面には､問いが宙ぶらりで終わっているのである。つまり、問いと答えの循環の連鎖の最後は答えがない。このことが意味するのは、問いの方が、答えよりもつねに最初にきて最後に来るというほど

に重要だ、ということなのである。そのことは『ピレボス』全体のテキストを振り返ってみると、登場人物のソクラテスの「一貫した方向への問い」が、もう一人の登場人物の青年プロタルコスの答えよりも、はるかにそれぞれの場面を大きく転換させていることから納得できるであろう。（１３）以上のような現象を、解釈学的循環という。われわれ読者にとって重要なのは、このような解釈学的循環が起きているということを意識することなのである。そしてこのような意識を含めて『真理と方法』では解釈学的経験と呼んでいる。

ここで注意しなければならないのは、以上にのべたことがらから、われわれは、「夢中になって読む」、あるいは「我を忘れて読む」というような現象を連想しがちなことである。しかしそれは解釈学的経験とは必ずしも同じではない。以下の解釈は筆者の見解であって『真理と方法』には書かれてないのであるが、それは西洋史の研究者にはおなじみのキリスト教諸派の修道院における「レクチオ・ディヴィナ（聖なる読書）」や、あるいは東洋史の研究者が扱う臨済宗の寺院における「看話禅」に近いように思われる。すなわち、そこでは修行者は異言語の聖書（ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語）や経（サンスクリット語、漢語）のテキストの一節に向かい合って、小声を出して読み、瞑想し、祈り、そしてまたそのテキストに戻るというような循環を経験しているのである。つまりここでも、決定的なのはテキストとのディアレクティケーなのであって、口頭によるディアレクティケーではない。

4　英語論文によるディアレクティケー

上にのべたようなテーゼは、『真理と方法』で示されているさまざまなテーゼのごくごく一部である。しかしそれでも、非常に迂遠ではあるが、各国の世界史研究者が世界史作品を批判的に議論する場合の議論の進め方として、次のように適用できる。

（１）各国の研究者はおのおのの主張を論文であらわすべきである。その主張に対する他の研究者の反論も論文によるべきである。言いかえれば、会議などでの口頭のやり取りでは不十分ということである。（２）その論文の書記言語は、現代の世界的な学問環境からみて英語、それもリングァ・フランカ（混淆語）としての英語で可とすべきである。つまり、アメリカの論文英語の基準を厳格に満たさなくてもよいのではないか。まずは論文で自説を開陳することが優先されるべきである。（３）そのようなリングァ・フランカのモデルは、日本の幕末から明治期の人々の創造した漢文のリングァ・フランカである。幕末から明治初期の日本語学術言語共同体に属していた人々は、近代西欧の学術言語を漢語で表記していた。世界史を例にとってみれば、明治以降に刊行されたさまざまな万国史に大きな影響をあたえた手塚律蔵（1822-1878）の『泰西史略』における地名、人名、事件名の多くは漢語で造語されていた（手塚 1858）。そして手塚は、同時代の世界史に関心のあった人々[6]と往復書簡によってディアレクティケーをしていたと言えるのではないか。そして日本語学術言語共同体で造語された漢語は、当

時の東アジア　———すなわち中国、ベトナム、朝鮮、琉球など———　のリングァ・フランカとなって広く流通したのである。たとえば「民族」とか「共和国」という日本語学術言語共同体の用語は、その後、東アジアの諸国の国名にまでなったといえるのではないか。このような事象をモデルとして、現代の世界史研究者は、英語論文に依拠して、対象となる世界史作品に対する批判や意見の交換を進めていくうちに、あたらしい概念を創造できるのではないだろうか。

筆者が期待しているのは、2 年前から世界各地でベストセラーになっているイスラエルの歴史家ハラリの『サピエンス全史』(Harari 2015=2016) という、非常にわかりやすい英語に翻訳された作品に対する、各国の世界史研究者の率直な学術的な批判論文なのである。

文献

Bubner, Rütiger, 1974-82, *Strategie der gegenwärtigen Philosophie*（＝ 1986、加藤尚武・竹田純郎訳『現代哲学の戦略』、勁草書房 .）

Davis, Natalie Z,1982, *Le retour de Martin Guerre*, Paris: R. Laffont.（＝ 1985, 成瀬駒男訳『マルタン・ゲールの帰還 —16 世紀フランスの偽亭主事件 』平凡社. ）

Gadamer, Hans-Georg, [1960] 1986, *Wahrheit und Methode*, Tubingen: J.C.B.Mohr.（ ＝ 2012，轡田収・三浦國康・巻田悦郎訳『真理と方法Ⅲ』法政大学出版局 .)

Harari, Yuval Noah, 2015, *Sapiens : a brief history of humankind*, NY; Harper.（＝ 2016、柴田裕之訳『サピエンス全史　文明の構造と人類の幸福』河出書房新社。

Jaynes，Julian，1976，*The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind*, Boston: Houghton Mifflin. (=2005，柴田弘之『神々の沈黙 — 意識の誕生と文明の興亡』紀伊國屋書店 .)　注 4 で引用。

Jullian,Camille, 1922, *Extraits des historiens français du XIXe siècle : publiés, annotés et précédés d'une introduction sur l'histoire en France*, Paris, Hachette.（＝ 1941，讃井鉄男訳，『近世仏蘭西史学概観』，白水社 .）

九鬼周造、大久保喬樹編、2011、『いきの構造』角川書店。

Leitch ,Vincent B. edit., 2001, The Norton anthology of theory and criticism., NY, W.W.Norton Company.

Levi-Strauss，Claude，1952，Race and history: The Race question in modern science，Paris, UNESCO.（＝ 2008，荒川幾男訳『人種と歴史』みすず書房 .）

Meillassoux, Quentin, 2006, *Apres la finitude. Essai sur la necessite de la contingence*, Paris, Seuil(＝ 2016 ，千葉雅也・大橋完太郎・星野太訳，『有限性の後で』人文書院 .)

プラトン（＝ 1975、田中美知太郎訳「パルメニデス ピレボス」『プラトン全集』; 4 、岩波書店 .）

Said,Edward W., 1978, *Orientalism*, New York: Georges Borchardt Inc. (=1993，板垣雄三・杉田英明監修，今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社. ）

三枝守隆，2006，「文献紹介」，『Newsletter』;8,4-7、世界史研究所．　取得：2017 年 11 月 13 日

http://www.npo-if.jp/worldhistory/newsletter/

同　上，2010,「世界史叙述の認識論な課題」『Newsletter』; 16, 5-8、世界史研究所 . 取得：同上 .

佐藤正幸，2004,『歴史認識の時空』知泉書館 .

Soja, Edward W., 1989, *Postmodern geographies: the reassertion of space in critical social theory*, London,Verso.（＝ 2003，加藤政洋ほか訳『ポストモダン地理学 : 批判的社会理論における空間の位相』青土社 .）注 3 で引用。

手塚律蔵、1858、『泰西史略』出版社不明。取得：2018 年 1 月 25 日 http://eichi.library.pref.miyagi.jp/eichi/detail.php?type=3&literatureId=50412

津田雅夫 、2014、『和辻哲郎研究 : 解釈学・国民道徳・社会主義』青木書店。

上野千鶴子編，2001,『構築主義とは何か』勁草書房 .

注

1　もちろん例外はある。学術的な言表と物語性を両立させたものとして史学界でよく知られているのは、ナタリー・デーヴィスの『マルタン・ゲールの帰還』であろう。

2　他の例として「ヨーロッパ」と「アジア」という地域名もあげることができる。「ヨーロッパ」は「大陸」と称されることがいまだに多いにもかかわらず、「ヨーロッパ」とほぼ同面積のインドはユーラシア（「ヨーロッパ」が先に来て「アジア」があとに来る合成語）大陸の一部であると、みなされてきた。「ヨーロッパ」という地域の名辞は、ギリシア時代以来そこに居住する人々によって拡大されてきたことは、周知の事実である。この 200 年間をとってみても、ライン川以西を指していたものがその後少なくとも三回にわたって拡大され、現代はウラル山脈以西が「ヨーロッパ」とされた。つまり、「ヨーロッパ」に属する人々がいう「ヨーロッパ大陸」とは自然現象としての「大陸」ではなくて、恣意的に、あるいは言語的に構築した名辞としての「大陸」である。だからその恣意性を逆手にとって、「ヨーロッパ唯一の仏教国」と自らを位置づけるカルムイク共和国のような国家がでてきたのである。

3　たとえば、マルクス主義地理学（Soja 1989=2003: 58-87）でさえも、差別的地名の命名法については一切ふれていない。

4　たとえば、現生人類の意識の誕生からの文明の歴史（Jaynes 1976=2005）。

5　社会神経科学（social neuroscience）とは 1990 年代に成立した学問分野。生体の脳内の血流や電気信号を直接観察できる fMRI（磁気共鳴装置）が開発されたことによって発展してきた認知神経科学の一分野。人間の社会的・情動的側面を分析し、人間の社会的プロセスと行動の基盤となる生物学的メカニズムの解明を目指している。

6　手塚の私塾で学んだ西周だけでなく、明治期になってから万国史をあらわした西村茂樹らとも書簡のやり取りがあったらしい。

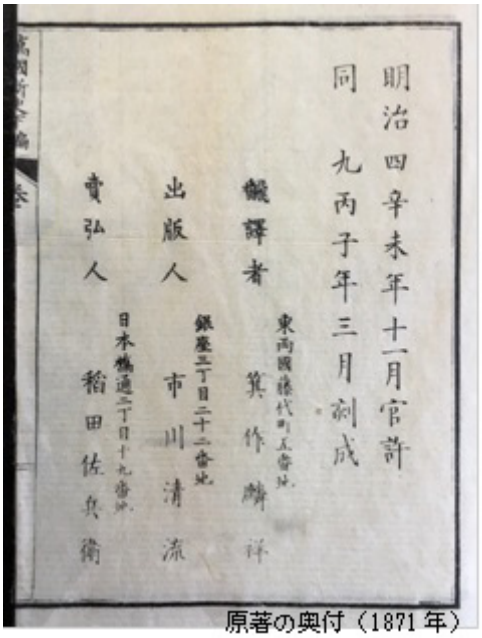
箕作麟祥編『萬國新史』翻刻によせて

『萬國新史』編集後記より

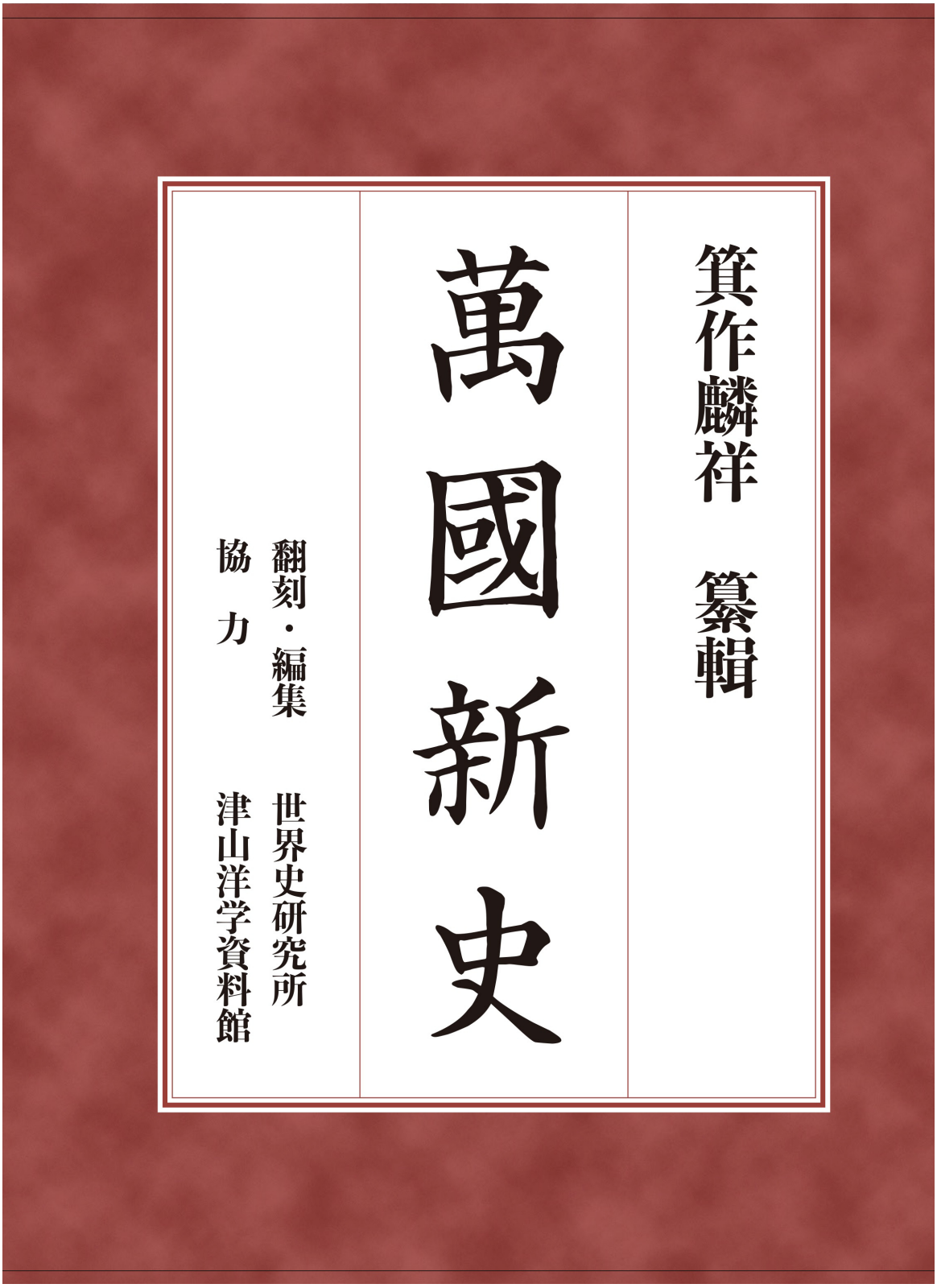
世界史研究所では、これまで内外の世界史に関する文献や研究動向を紹介すると同時に、日本およびアジア諸地域の歴史教科書や教育制度の変遷についても系統的にとらえようと努めてきた。今回、ここに新たな装いのもと出版の運びとなった箕作麟祥編『萬國新史』(明治四～十年) は、該博な知識情報と高い叙述水準を有する、本邦初の世界史本であり教科書であったといっても、おそらく差支えないだろう。

本研究所がおよそ一四〇年を経て同書の再出版（翻刻）を目指したのは、所長南塚信吾がその価値に着目し、奉職していた法政大学の最終講義の主題に取り上げたことがきっかけであった。本研究所でも、本書は現代において広く読まれる意義のある本だと判断し、和綴じ本で全十八冊の本を、現代人に分かるように活字化しようと考えた。しかし、原著が持つ幕末から明治初期の洋学の熱を、いかに損なわずに、現代人にとって読みやすい形に示すべきか模索を重ねるうちに、ほぼ五年という思わぬ長い月日が流れてしまった。明治初期のこの時期はちょうど文章語が漢文中心のものから脱皮しつつある時にあたり、その時期の文章を現代人に分かりやすいように「翻訳」することは、難しい仕事であった。この試みの成否についてはみなさんの判断にゆだねるが、世界史、あるいは世界史という学問にたいするみなさんの関心に、多少とも応じるものとなったなら幸いである。

わたしたちは本書の意義を考え、商業出版物として広く世に問いたかったが、様々な理由から、それはかなわなかった。今日の出版事情がそれを許してくれなかった。そこで、わたしたちは、世界史研究所の自費出版物として本書を世に問うことにした。みなさんのご支援を心からお願いする次第である。

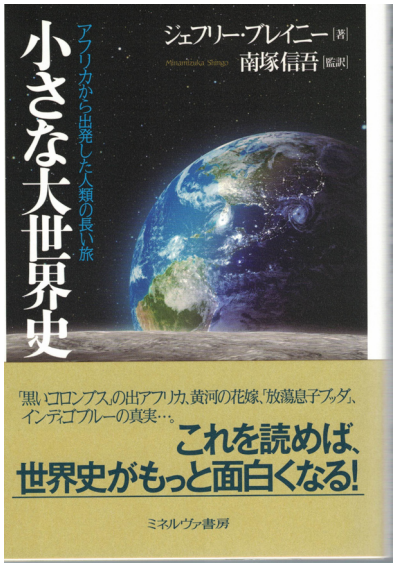


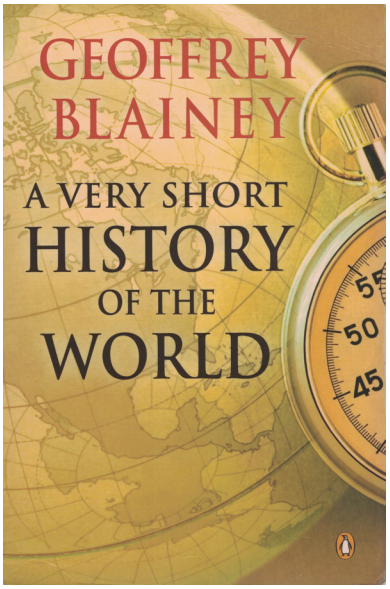
原著の奥付（1871 年）


萬國新史
箕作麟祥　纂輯
翻刻・編集　世界史研究所
協　力　津山洋学資料館

世界史研究所関連書籍のご案内

ジェフリー・ブレイニー、南塚信吾（監訳）『小さな大世界史—アフリカから出発した人類の長い旅』（ミネルヴァ書房、2017 年）が好評です。





本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2018 年 07 月 31 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.npo-if.jp/riwh/

スタッフ

所　長	南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問	下村 由一（千葉大学名誉教授）
	百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
研究員	木村 英明（早稲田大学講師）
	木村 真（日本女子大学講師）
	鈴木 健太（東京外国語大学特別研究員）
	山崎 信一（東京大学講師）
	姉川 雄大（千葉大学特任助教）
	崎山 直樹（千葉大学特任講師）
	鹿住 大助（島根大学講師）
特別研究員	稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
	近藤 正憲（学術博士）